

プロローグ

薄暗闇の中、ぼんやりした床からのピンク色の淡い照明を受けて、一人の女がくねくねと身体を動かしていた。

女は、自分の乳房を自らこねまわし、ぽつぽつとした唇を舌で湿らしながら切なげに喘ぎ声を漏らしている。

女は全裸だった。身には何もつけていない。その整った顔立ちが平素なら冷たい美貌などと例えられただろう。しかし今はすっかり性欲の虜になっているのか。ピンク色に上気した頬と焦点の合わない瞳、半開きの唇がなんとも浮蕩な表情を醸し出している。思考力も無くしているのか、回りにいる人々の視線さえ気にする様子もなく、自らを辱める行為に没頭している。

そう、まわりにはかなりの男達が息を嚙めてその淫らなショーを凝視していた。

良く見ればその部屋の中には件の女の他にも数人の裸女がいて、同じように身体をくねらせている。各々の周りを男達が囲んでそのオナニーショウを見物しているのだ。

しかし美しさと気品、という点ではその女が群を抜いていた。いきおい見物する男の数も多い。

ドラッグの紫煙が立ち籠めるこの部屋はオーギーパーティの会場なのか。

女はその円錐形に突き出した美しい乳房を、自らの指で激しく揉んでいた。勃起した乳首が怪しく濡れて光っている。そして無毛の股間をこれ見よがしに、ギャラリに突き出し、腰をくねらす。見物人が居る事など気にしていないようだった。いや、むしろ見物されているという事実が、女をより興奮させているようだ。その肉の贅の内部も、濡れてきらきらと輝いている。

「おおっ…あふっ…」我慢出来なくなったのか、女がついに大きな声を漏らした。

「んんっ…いいっ」

近くに居た男の一人も我慢出来ずに手を伸ばした。女の股間に触れソフトに撫で上げる。

「ああふっ！」その瞬間、女は感電したかのようにのけ反ると男達の中に身を投げ出すように倒れ込んだ。

男達は一齐に女の身体をまさぐり始めた。豊満な乳房にしゃぶり付く者。尻に触れる者。白い肉に男達の黒い肉が重なる。

それを合図にしたかのように、部屋のあちこちで男達が女を弄び始めた。

悲鳴とも嬌声ともつかない声上がる。女達は触れられただけでいとも簡単にエクスタシーに達しているようだった。股間から大量の愛液がほとばしり、男の顔を濡らした。

たまらずズボンを降ろした男がペニスを女の身体にこすりつけている。さんざん焦らされ昂った男達は、我先に性器を女の肉体

にねじ込もうと前後左右から殺到した。何本もの凶器が女の汗ばんだ肌にこすりつけられ、穴という穴に潜り込もうとする。乳房に押し付け早くも精液をほとぼしらせる者までいる。

女は獣のような声をあげながら黒髪を振り乱し二度三度と、狂気の絶頂に身を震わせて啼き喚いて悶絶した。

その時、部屋の扉が豪音とともに吹き飛んだ。眩い閃光がひらめき、部屋にいる人間の視覚を奪う。

「動くな！ 麻薬捜査官だ！」そう名乗った男達がなだれ込んで来ると、スタンステイックを振るい抵抗する者をたちまち制圧して行く。

一人の小柄な捜査官が犯される美女の近くに走り寄って来た。「おらっ邪魔すんな！」まともな人間なら捜査官に抵抗することなどまずないのだが、ドラッグに酔い、女との性交を中断されたためか、一人の若者がその捜査官の進路を塞ぐように立ちはたかった。

若者が殴り掛かった次の瞬間、捜査官は華麗なステップで拳を躲すと、スタンステイックを鳩尾に叩き込んだ。

「ぎゃー」悲鳴をあげると若者は床に倒れ悶絶した。

そんな男を冷たい瞳で一瞥すると、捜査官は美女の近くへと駆け寄った。美女の尻にはまだしがみついて腰を振る痴れ者がいた。捜査官はそいつを蹴飛ばすと女から引き離れた。ジャンパーを脱

いで肩に羽織らせて女の肌を隠す。そして美女の顔を覗き込みながら大声で叫んだ。

「先輩！ 大丈夫ですか？ 先輩！」

その捜査官は男達の間では小柄に見えたが、けして女性としては小さくなかった。

彼女は麻薬捜査局の女捜査官、黛真子。そしていまだにエクスタシーの余韻にうつろな眼をして床にいざっている美女は、その先輩にあたる捜査官、泉川響子だった。

ACT 1

「いい加減にしないか！ この件では今後一切潜入捜査は使わない！ これ以上私の娘達を危険に曝す訳にはいかん」極東麻薬捜査局東京支部長、桂正二は真子の言葉を遮ると声を荒げた。「君の気持ちは分かる。だがやつらはこちらが考える以上に凶暴だ。響子君をあんな目に会わせたのも、我々に対する挑戦以外の何ものでもない。これがどういふことか…分かるだろう…」

真子にもそれは分かっていた。麻薬組織（捜査局は彼等を「籠」と呼んでいた）は全く自分達を恐れていない。それどころか潜入捜査した響子を捕らえ麻薬漬けにしただけでなく、恐ろしい肉體改造まで施していたのだ。

響子のクリトリスの基部にはシリコン製のリングが埋め込まれていた。それもただのシリコンではない。合成麻薬Z9と呼ばれる薬品が練り込まれていて、それがじわじわと溶け出して女の核を刺激するという代物だ。

Z9は麻薬というよりは覚醒剤に近く、特に性的刺激を極限までブーストするという特徴があった。今現在もっとも局が根絶しようとしている薬物だった。

さらに響子のクリトリスの周辺には人工脂肪で出来たいぼが三つ埋め込まれていた。少しでも腰を動かすと、このいぼがクリト

リスを刺激して、Z9の効果と相まって女を絶頂に送り込む。こんな改造をされた女はもうまともな生活は送れない。あまりにも非人道的な所業だ。まあ麻薬組織に人道などを期待する方が愚かというものだろうが。

響子は真子にとって先輩以上の存在だった。麻薬捜査局は様々な場所から人材が調達されている。真子は元々厚生省医薬品安全局の研究員だった。そこから抜てきされ麻薬捜査官になったのだ。銃の撃ち方はおろか、捕縛術さえ素人だった真子に「一から教えてくれたのは、警官出身の響子だった。」

許せないと思った。一人の女性をまるでおもちゃか何かのように改造し、捜査局をからかうために乱交パーティーの会場に放り込んだのだ。

「でも…潜入捜査以外、手掛かりを掴める方法は…私がかまいません！ 部長！ 私を使って下さい」

黛真子はまもなく二十六歳になる。ナチュラルにカットしたボブヘアの顔立ちはやや年より幼く見えるが、大きな瞳と頑固そうに閉じられた唇が、意志の強さを物語っている。学生時代、水泳で鍛えたその肉体はスーツの上から見てもかなりのメリハリがあり、特にミニのスカートから半分のみぞく太腿は、みっしりと重量感がありなおすらりと長く、その脚から繰り出されるハイキックは大の男でも一撃で失神させる程威力があった。もっとも実戦経験はほとんどなく、数年間婦人警官として活躍していた先輩の響

子のように場慣れはしていない。

「くどいぞ！ 黛！ 今回の件だけで東京支部は大恥をかいたんだ」

桂支部長は元警察官キャリアで四十代の若さでこの東京支部の長に任命されたエリートだ。やや体面を気にするきらいはあるものの、部下に対する思いやりに溢れたいい上司だと真子は思っている。

「ボス、アメリカの麻薬取締局から派遣されて来た捜査官がいらっしやっています」秘書が来客を告げた。

その女は見事な金髪をしていた。青い瞳と肩まである軽くウェーブしたブロンド。見てくれはまさにヤンキー娘、と言ったところか。美人というよりはキュートな白人女性だった。しかし驚いたことに彼女は見事な日本語を操った。

「ですからこちらで拳銃と装備一式を貰うように言われて来ました。私のガンは入国時に預けてしまいましたので…」

「銃は用意しましょう。しかしこの捜査にあなたを入れる訳にはいかなさ」

「誤解しないで下さい。私はあなた方の捜査に協力するために来日した訳ではありません。あなた方に私の捜査を手伝ってもらう事はあるかもしれませんが…」

「勝手にこの東京で捜査されては困る」

「私はこの組織の幹部と思われる男を追って来ました。この件については全権を与えられています。麻薬犯罪捜査法に照らしても私の調査をあなた方が拒む事は出来ない筈です」

金髪の女、ジャネット・メイヤーはつかつかと桂の机に近付くと、見下ろしながら傲然と言いつつ放った。

「ナンブ式オートマチック、ここで使われている標準的な銃です」「小さな銃ね…こんなので戦えるの？」

ジャネットは真子から渡された銃を手慣れた感じでチェックすると上着を脱いだ。ここは局の銃器ロッカー。

下に着たTシャツの胸が、ラゲビーボールのような見事なバストによって前方に盛り上がっている。女の真子が見てもジャネットの肉体はどきどきするくらい悩ましかった。胸やヒップのボリュームに較べて、信じられないくらい縮まったウェストが羨ましい。太腿の大きななら負けないが脚の長さもジャネットが弱冠勝っているだろう。ミニから伸びた脚は身体の半分以上あった。

ホルスターを着け銃をすべりこませるとジャネットは再び上着をつけ、真子に向かってにっこりと笑いかけた。「ありがとう、さて…あなたは私のお目付役つてどこかしら？」

夜の帳がおりた東京の夜景は世界でも有数の美しさだと言えるだろう。しかしその美しい灯の下で今や戦争でも貧困でもない、

恐ろしい魔物が人々を蝕みつつあるのだ。

ジャンネットの仮宿となるホテルで食事を終えた二人は、バーでグラスを傾けつつお互いの事を語り合っていた。

驚いた事にジャンネットは真子より4歳も若かった。

「跳び級っていつのかしら…私は人より早く大学に行けたの。捜査官になったのは十九歳の時よ」

「すごいわね。天才だったの？」

「アメリカではそれ程珍しい事じゃないのよ」

「でも、日本語、うまいじゃない」

「それは…昔日本に住んでいたの。十歳まで…その時好きな男の子がいたの。だから忘れないように勉強は続けたの…」頬を微かに赤らめながらそんな話をするジャンネットを見ると、年相応の女の子の素顔が透けて見えるようで、真子は彼女を改めて眺めてみた。

そのグラマラスな肢体に騙されてしまうが、自分の事を訥々と語るその横顔は確かに二十一歳の若い女性だった。

「さつきは桂さんにあんな言い方したけど…私の捜査を邪魔しないで欲しかっただけなの…この犯人はなんとしても私の手で…」

真子は桂から、ジャンネットの世話とともに、彼女が勝手に動かないように監視する命令を受けていた。それは同時に真子自身現在の捜査からはずされることを意味していた。

「私が追っている犯人は私の同僚を殺したの。あいつだけは私が

捕まえないければ…」

犯人は今、真子達が調査している組織の関係者らしかった。らしい、というのは麻薬組織がまったく謎に包まれているからだ。末端の売人を何人捕まえても組織の幹部にたどり着けない。一番効果的なのは潜入や囲捜査なのだ。ようやく法律が改正され、日本国内でも囲や潜入捜査が合法化されたが、今回の響子のように犠牲も多かった。

翌日からジャンネットは東京での捜査を開始したが、初めての街で何かできる物でもなかった。

それでも彼女は一日中歩き回り、聞き込みをして回った。そんなジャンネットを真子はただそばで見守っているしかなかった。協力する事は禁じられていたし、彼女もそれを頼んでは来なかった。

それはジャンネットの後をついて、とあるターミナル駅の雑踏を歩いている時だった。

真子は一人の男に目をとめた。見覚えがある。響子が囲捜査で関わっていた売人の一人だ。薬を欲しがる主婦、という役で響子はこの男に近付いたのだ。何度か接触するうちに彼女は行方不明になってしまった。

男を逮捕すべきだ、という意見もあったが、桂は末端の売人を捕まえても、百害あって一利無しと言って許さなかった。

「誰なの？」ジャネットが立ちすくむ真子に気が付いて声をかけて来た。

簡単に男の説明をするとジャネットは笑って「じゃあ尋問してみましよう」そう言うのが早いか、男に近付いて声をかけてしまった。

「お兄さん。何か楽しい事ない？」

「日本語うまいね。姉ちゃん。なんだってあるぜ」いかにも軽薄そうな優男だった。

ジャネットがこちらを向いてウィンクをした。

数分後、ビルの狭間の空き地で男は声も出せずに悶絶していた。ジャネットが容赦なく男の指をへし折っていたのだ。

「ジャネット！ やり過ぎたわ」

「平気よ。私はあなた方東京支部とはかかわりがないもの。これは私の調査の一環よ。さあ！ 目を覚ましなさい。あんたに薬を卸している人間について、なんでもいいから話すのよ。しゃべらないと…」そういうとジャネットは懐から拳銃を取り出して男の額にこりこりと押し付けた。その巨大なハンドガンを見て真子は息を飲んだ。支部から支給された小口径の銃とは似ても似つかない代物だったのだ。

「そろそろ、そんなこと…」

ガシャ…遊底を引いて薬室に弾を送り込む。

「受け渡しは三丁目の事務所です…でも二、三カ月ごとに場所は変わ

るし、連絡もあつちからしかこない…」

ありきたりな返答だった。

「そんなことしか知らない役立たずなら、死んだ方がましね」そう言うのとジャネットは引き金を引いた。乾いたカチリという音がした。

「いったいいつの間にそんな手に入れていたの？」部屋に入ると真子はジャネットにソファを勧めた。

ここは真子の自宅のマンション。質素なワンルームだ。

小さなソファにジャネットは長い脚を組んで座った。真子は冷蔵庫から缶ビールを二本出して、一本を彼女に渡した。真子は自分のベッドに腰掛ける。

「まともなことをしていたら勝てないわ」缶ビールを啜りながらジャネットは悪戯っ子のように笑った。とても可愛らしいと真子はある。「あの男、気になる事言ってたわ。事務所に見知らぬ中国系の男…私の追っているのも…」

「組織には国籍に関わらずいろんな人が…」

「二月前から出入りしているってのが気になるのよ。あいつ…陳が日本に来たのもその頃だし。とにかく私は調べてみるわ。手伝ってくれるわね？」

ジャネットはにつこり笑いながら、とんでもない事を当たり前のように言った。あまりの事に真子は笑い出してしまった。モデ



ルガンで脅された売人も、今頃震えながら東京を脱出している頃だろう。

「いいわ。ジャネット。私もいい加減イライラしてたところなの。出来るだけやってみよう」二人はカチンと缶を触れ合わせた。

それから二人は局のデータベースにアクセスして必要な情報を集め始めた。ジャネットは東京支部のデータを見る事が許されていなかったのだ。

ACT 2

「あれを見て！」ジャネットが真子に囁いた。

「陳に似ているわ」
真子の車でアジトと思しき事務所のあるビルを、交代で監視を始めて三日めのことだった。

たった二人で監視を続けるのは大変な作業だった。トイレにも行けず一瞬でも目を離せない。どうしても、と言う時は休んでいる相手に連絡してもいいと言う事にしてあったが、二人は一度もお互いに頼らなかつた。この三日間で真子とジャネットは相手が信頼に足る相棒だと認識し合うようになっていた。

それはちょうど二人が交代するために、車の中でハンバーガーを食べながら、引き継ぎをしている最中だった。

男は一人で車に乗り込むと発進した。

「追っわ」

その時真子の携帯が鳴った。

「はい。黛です」

「真子君か。例のアメリカさんはどうしている？」桂だった。

「はい…今、ホテルへ入るのを見届けました」

「そっか…ごくらうさん。変な事をしないようにしっかり見張りを頼む」

そういうと電話は切れた。真子とジャネットは顔を見合わせて笑った。

車は湾岸方面へと向っている。一台だけの追跡なのであればお終いだ。やや距離を開けて追尾するしかない。

人気の無い倉庫ばかりの場所に差し掛かった時だった。突然横道から巨大なトラックが突っ込んで来た。前方に気を取られて反応が遅れたジャネットの運転は辛うじて衝突を避けたが、車は反転して止まってしまった。慌てて発進させようとした所へ今度は後ろから来た乗用車が前を塞ぐ形で停まる。

「何をしているの！ 速くどけ！」ジャネットは身を乗り出してそこまで言う口を噤んだ。トラックと乗用車から何人も男達が降りて来たのだ。その手には拳銃が握られていた。

気が付くと二人の女は薄汚いベッドの上に、大の字に縛り付けられていた。

「ジャネット。起きている？」

「ええ…待ち伏せされるなんて…私達が見張っていた事がばれていたのかしら…」

「あの事務所は売人から聞き出した場所とは違うわ…でも、あんな畏を張るには私達の行動が知られていたってことね…」

「真子…ごめんなさい。私の捜査の巻き添えでこんな…」

「反貧会はそのへんでいいですか？」

突然部屋の前が点り、でっぴり太った東洋人が部屋に入ってきた。その横にはジャネットが尋問したあの売人がいる。

「陳！」ジャネットが縛られた身体から首だけ持ち上げて叫んだ。「ジャネット、君は相棒を殺されただけじゃ不服とでも言うのかね。それとも僕に気でもあるのかなあ。ひひひひ」陳と呼ばれた男は、噛み付かんばかりに顔を振って歯を剥き出しているジャネットをからかうと、次に真子の方を見た。

「これはこれは美しいお嬢さんだ。いじり甲斐があるね。二人ともこれからどんな目に会うのか説明してあげよう」

売人が代わりに前に出る。矢野と名乗る男は、先日の臆病な売人とは別人のようだった。

「お前達、俺がただの売人だと思ってたのが運の尽きだな。俺があの一带を取り仕切ってる幹部の一人だったのさ。それも知らずに囮捜査の女が接触してきやがったから、改造してやった。お前達にも同じ改造を施してやるぜえ」

ただのチンピラだと思っていた男が実は幹部の一人だったとは…初めから囮捜査は失敗する運命だった事を知って真子は驚いた。何ヶ月もかけて下調べをした筈ではなかったのか。

「特におまえ、パツキンのねーちゃんは俺の指まで折ってくれちゃったからなあ。たっぷりお返ししてやらないと…」男の目が異様な輝きを放っていた。以前尋問した時には想像出来ない凶悪

な面相だ。

「麻薬奴隷にしてやるからな。楽しみにしてろ」

(響子先輩のような身体に改造？ それだけは耐えられない。あんな改造をされたら他人のおもちやとして生きることしか出来なくなる) 真子はぞつと鳥肌が立つ思いだった。

一人の男と一人の女が部屋に入ってきた。二人とも白衣を着ている。女は台車を押していてその台車の上にはメスや鉗子の様な医療器具や得体のしれない器具が並んでいる。

「それじゃこの金髪の女から始めちゃって下さい。手術は1時間もあれば終わる。傷口も二三日もあれば癒着するぞうだ。また会おう」

二人の男は出て行った。

「いやーつやめて！ NO！」ジャネットの悲鳴が部屋にこだましたが、無理矢理女に麻酔ガスを吸わされると声は小さくなりやがて泣きながら眠ってしまった。

真子は手術の一部始終を見るはめになった。

真子は夢を見ていた。酷く淫らな夢だった。何人もの男に身体中を弄られ舐め回されていた。しかしそれが少しも嫌ではなく、それどころかあまりの快感に脳が痺れるようだった。ぬらぬらと濡れた身体を男達の手が這い回り、女の最も敏感な部分を擦り上げて来る。あまりの心地よさに真子は啼いていた。にもかかわら

ず尽きぬ欲望に真子は餓えていた。

もつと自分をいじり回して欲しかった。いや、男が欲しかった。男のもので何度も何度も突き上げて欲しかった。しかし男達は何故か身体に触るだけで、最後の一線を越えようとはしなかった。あまりのもどかしさに真子は声を上げた。

気が付くと真子はベッドの上に寝ていた。夢の中で叫んだために目を覚ましたらしい。起きようとして初めて腕が後ろ手に拘束されている事に気が付いた。自分の身体を見ると全裸だった。並んだベッドに同じように全裸で寝ているジャネットが見える。

身を振って起き上がりうとして、突然股間から強烈な感覚が登って来て真子のはけぞつて倒れてしまった。「な、なんなの？」股間に何かあるのかと思い、覗き込んだが何も無い。いや恥毛がきれいさっぱり無くなっている。まるで幼女のような割れ目がそこにはあった。

「おっつー」ジャネットが横のベッドで同じようにのけ反っている。目を覚ましたらしい。

「ジ：ジャネット：気が付いたのね」

「真子：これは…なんなの？ 私、どうにかなってしまっそうおっつー」

「私達、あいつ等に改造されちゃったのよ」

真子の説明を聞いてジャネットは毒づいたが大きな声を上げ

るだけでクリトリスがびんびんと快感を伝えて来てたまらない。じっと大人しくしているしかないようだった。

「お目覚めかね」

陳と矢野が部屋に入ってきた。

「埋め込んだリングから麻薬が染み出して間もないからな。お前達が狂うのはこれからぞ。取りあえず初めはこいつを着けてもらおう」

男達は革の拘束具を取り出すと二人に装着した。それは顎まで被うような首枷から前後にバンドが伸びていて、一本は後ろ手に縛られた腕に繋がれた。もう一本は胸の間から降りし途中で二本に分かれ、乳房の下を回るように背中にまわり後ろで繋ぐようになつていた。

首枷の顎の先端部分には男根型のギャグが取り付けられてあり、いやがる女の口に無理矢理押し込まれた。

「むーっぐぐぐぐ…」怒りを込めた腫で男達を睨み付ける二人を乗しげに眺めながら矢野は首枷の後ろに付いた器具を頭頂部から回して真子の鼻孔に引っ掛けた。所謂、鼻フックだった。

「ふっぐぐぐ」不様な声をあげる真子の顔を覗き込みながら矢野が説明した。

「こいつはただのフックじゃねえ。この頭頂部に小型のタンクがあって、ここにZ9の水溶液が入ってるんだ」そついうと頭頂部のフックに繋がるベルトの膨らみを手のひらで押した。

その瞬間、真子の脳髓にピンク色の爆発が生じた。

「ふぎやああああああああ」真子はその時生まれて初めて快感のあまり失神した。

矢野はぴしゃぴしゃと真子の頬を叩いて彼女の目を覚まさせた。

「どうだい？ お嬢さん。鼻の粘膜に直接Z9を噴霧された気分は？ このフックの先端から麻薬が吹き出る仕掛けになつてるのさ」

夢うつつの中で悪魔的な説明を聞きながら、真子は絶望に味付けされた甘美な快感の余韻に、うち震えていた。こんな気持ちいい事に人が耐えられる筈はないと思つた。目の前に居る男は尊敬する先輩、響子を奴隷に改造した憎むべき男なのだ。にもかかわらず憎しみを感じるどころか、今一瞬、あまりの快楽に感謝の念さえ覚えてしまったのだ。真子はそんな自分を恥じた。(真子。どうしちゃつたの？ こんなやつらに責められて我を忘れるなんて…私の身体…どうなつちゃうの？)真子は自分の肉体が、自分のコントロールを離れて勝手に暴走する様に唖然としていた。これが魔薬の力なのか…どうしたら肉体を自分に取り戻す事が出来るのか。いや、そもそも肉体は元々自己の管理下にあつたものなのか…それすら今の真子には判然としなかつた。

陳も同じようにフックをジャネットの形のいい鼻に引っ掛けようとして苦労していた。ジャネットは金髪を振り乱しながら抵抗している。陳は片手で顎を掴み彼女の顔を固定すると、ようやく

フックを鼻孔に挿入することに成功した。

「ふがあああ」ジャネットの可愛らしい鼻が上を向く。あまりの屈辱に涙がひと雫、彼女の眼からこぼれ落ちるのを陳は会心の思いで見つめていた。

「ふひひひひ、ジャネット。随分面白い顔になったじゃないか。可愛いよ」素晴らしいながらジャネットの鼻をぐりぐり弄ぶ。

「んーっんーっ」ジャネットは柳眉を逆立てて陳を睨み付けている。「ほう…怖い眼だ。いいねえ気が強い女は。いたぶりがいがある。その調子だぞ。ジャネット。どこまでもつか試してやろう」そう言うとしつかりとフックを鼻の奥まで差し込み頭頂部にあるタンクを押した。

「ふぎやああう」まるで豚のような声を上げてジャネットはのけ反り悶絶した。ベッドの上に倒れたジャネットはびくびくと全身を震わせ、やがて動かなくなつた。

長々とこのびた美しい肢体を陳はしばらく眺めていた。綺麗な白人女だ。スラム出身の自分と違って育ちもいい。これからこいつを思う存分凌辱出来ると思うと、以前この女に自分の組織を潰されたのも帳消しでいいような気がして来た。

やがてそんな思いを振払うかのように、その仰向けになつてもこんもりと盛り上がる乳房を、やわやわと揉み始める。

「うっむむ…」無意識ながらジャネットが眉を寄せる。陳は優しく乳房の裾野から乳首に向い、手のひらで愛撫している。

「ふむう…」気絶しても感じているのだ。

ニヤリと笑うと陳はうつつて変わって乳首を強く摘んだ。「きゅうううう」塞がれた口から悲鳴が漏れ、ジャネットは覚醒した。

「ひひひ。それ！」調子に乗って陳は乳首を乱暴に振ったり引っ張ったりして、ジャネットから悲鳴を引き出す。麻薬によってプーストされているため、乳首いじりだけでもジャネットは何回も絶頂を極めていた。それでも陳は執拗に乳首をいじり倒している。限度を超えた快感は苦痛と変わらなかつた。

「むぐーっふむむぐっ」ジャネットの乳首をおもいつきり指でつぶした。青い瞳が真ん丸に見開かれ、涙がほとぼしる。過負荷にジャネットの脳は悲鳴を上げ、限界を超えたところで再び彼女は失神した。

男達は二人の美女を犯し始めた。

陳はジャネットを後ろから抱きかかえると、ラグビーボールの様に突き出したバストを揉みしだく。びんびんに勃起した乳首はピンク色からルビー色に染まり、陳の乱暴な指技に奇妙な形に乳房は歪んだ。全く違う方向に突き出した乳首が激しく揺れ動きその先端から汗のしずくをまき散らす。揉まれただけでジャネットは強烈な快感とも苦痛ともいれない衝撃に、白眼を剥きながら何度も悶絶する。

脂汗にまみれててかてかと光るジャネットの乳房はそれ自体が